

第 110 回 岡 山 外 科 会

と き：平成元年10月29日（日）10時より

と ころ：水島国際ホテル

会 長：森 本 接 夫

（平成2年4月2日受稿）

1. 乳癌リンパ節転移に対する DSA の診断能

水島中央病院外科 竹内 龍三 江田 泉 森本接夫
岡山赤十字病院外科 辻 尚志 佐藤 泰雄

手術を施行した16例の乳癌症例に対して、IADSA 所見とリンパ節転移の有無について検討した。転移陽性のリンパ節はいずれも腋窩リンパ節で、DSA では腫瘍濃染・造影剤貯留像として認められた。DSA 所見によるリンパ節転移の

正診率は16例中14例87.5%であり、誤診した2例も偽陽性例であった。このことより DSA は乳癌のリンパ節転移に対して、腋窩リンパ節のみならず胸骨旁リンパ節も含めて、転移の存在診断に有用な検査法であると考えられる。

2. 乳癌サーモグラフィー所見と予後

岡山大学第二外科 村上 正和 三角 俊毅 白杵 尚志
小松原 正吉 寺本 滋
国立病院四国がんセンター外科 高嶋 成光

国立病院四国がんセンターにて赤外線サーモグラフィーを施行した手術切除乳癌206例を対象とした。Hot Spot と臨床病理学的予後因子の関係を検討した。また、Hot Spot、血管パターン

の左右差等の5つの異常所見陽性群と陰性群の健存率を比較した。サーモグラフィーにおける異常所見陽性群は陰性群に比して予後因子と健存率において不良の傾向があり、乳癌サーモグラフィー所見は乳癌における悪性度の指標になりうると考えられた。

3. 切除標本の扱い方と画像診断の工夫

川崎医科大学附属川崎病院（放） 平松 収
同（外） 光野 正人
同（写） 青山 一則

画像診断が発達し診断能が向上したが、噴門部癌、大腸II C型癌など切除標本肉眼診断に頼る点が多い。半固定時適正処理された標本は、粘膜面に限らず壁全層病変の検討に欠かせない。要点は X 線 2 重造影像に対応した適度壁伸展と

粘膜面を水平にし、粘液等を除去し微細観察を容易にし、過度な赤色調を下げ、非癌部の柔軟さを永久標本にもある程度保存でき、粘膜の可動性、壁湾曲性等の検討が可能となる。ゼロックスコピー（～2倍拡大）により粘膜面、漿膜

面の記録性が向上する。更に軟X線単純・2重造影効果像により、X線像情報が得られ、今迄偽陰性とみなされたXP・SPに有用な所見が発見でき、X線像読影能の向上に連がる。X線CT

の画像処理（画像フィルター処理、Add処理による3次元情報像など）につき供覧しご理解とご援助をお願いした。

4. 腹壁癒痕ヘルニアの治療経験

国立岡山病院外科	臼井 由行	平井 隆二	大西 敏行
	松原 淳	宇野 浩司	田中 信一郎
	野村 修一	東 良平	佐々木 澄治

昭和51年より平成元年までの14年間に当科で経験した腹壁癒痕ヘルニア31例（男性12例、女性19例）の治療成績について発表した。当科では今まで、人工材料を用いることなしに、筋肉

弁を移動させる方法で、かなり大きなヘルニアでも治療してきたが、本法でも8例中2例に再発があり、本年よりMarlex meshの使用を試みつつある。

5. 腹壁再発性ヘルニアに対する治療経験

川崎医科大学形成外科	江藤 久志	森口 隆彦	岡 博昭
	河村 進		

腹壁の再発性ヘルニアに対し、外側大腿回旋動脈を血管柄とする島状の筋膜弁を使用し腹壁を再建した。この島状の筋膜弁は、血行が保たれたままで移植できるため健常組織と同等で、抗張力にも優れており、ヘルニア治療に際して

理にかなったものである。さらに、島状で使用するため、有茎弁に比べて移動が容易であり、到達距離も長くなる。また、free flapとしても使用可能であり、今後、有用な方法となると思われる。

6. 側頸嚢胞から急性化膿縦隔肺炎をきたした1手術例

川崎医科大学胸部外科	原 太久茂	藤原 巍	土光 莊六
	野上 厚志	山根 尚慶	三宅 隆
	勝村 達喜		

症例は45歳男性で、急性扁桃腺炎様の症状にて発症し、胸痛、起坐呼吸症状へ進展したため当院へ入院となった。胸部X線写真で縦隔陰影の拡大及び右胸水貯留を、CTでは、縦隔及び心嚢内に膿性液の貯留を認めた。下咽頭に開口していた側頸嚢胞の造影で左側頸部から縦隔に達する嚢孔が形成されていた。右側開胸を施行

した所、膿は食道、気管、上行大動脈周囲に多量に認められ、又、心嚢内にも軽度血性の心嚢液が貯留していた。結局気管及び食道周囲、上行大動脈周囲、心嚢内、右胸腔内、頸部嚢孔内へドレナージを施行した。起因菌はStaphy. aureusであった。術後2ヵ月半で全てのドレナージは抜去でき良好な結果を得た。

7. Bronchial Mucous Gland Adenoma の1例

岡山大学第二外科 岡部 和倫 原 享子 佐野 由文
宮井 芳明 多胡 護 清水 信義
寺本 滋

極めて稀な, Bronchial Mucous Gland Adenoma を報告した. 患者は77歳男性. 血痰の精査中, 左気管支主幹にポリープ状腫瘍を認め, 生検で, Bronchial Mucous Gland Adenoma と診断した. 気管支を管状切除し, 腫瘍を摘出し

た. 組織学的に, cancer in adenoma を認めた. 本腫瘍は, 一般に良性とされているが, 悪性化の可能性は完全には否定されていない. 従って, 詳細な病理学的検索と, 嚴重な長期経過観察が必要である.

8. 集検発見の胸腔内異所性甲状腺腫の1例

岡山済生会総合病院外科 寒竹 一郎 大原 利憲 北村 元男
木村 秀幸 枝廣 徹 守本 芳典
河田 裕二郎 片岡 和男

異所性甲状腺腫のうち胸腔内に発生するものは極めて稀とされている. 我々は検診による偶然発見の上縦隔腫瘍で, 摘出標本により異所性甲状腺腫と診断された症例を経験したので報告した.

患者は45歳男性. '89年6月の胸部 X 線検診

で無症状の上縦隔異常影を発見された. 胸部 CT にて上縦隔腫瘍と診断し, 胸骨正中切開により腫瘍を摘出した.

病理組織検査では, 異所性甲状腺の濾胞状腺腫であった.

9. Diffuse axonal injury 11例の CT 所見とその予後

岡山大学脳神経外科 筒井 巧 西野 繁樹 西条 寿一
久山 秀幸 三好 康之 西本 詮
水島中央病院脳神経外科 秋岡 達郎

臨床経過および CT 所見から Diffuse axonal injury の疑われた11例の重症頭部外傷患者について retrospectively UCT を検討し, 以下の結論を得た.

1) 遷延性意識障害を示す患者群では初回 CT でくも膜下出血を認めることが多かつ

た.

2) 遷延性意識障害を示す患者群では慢性期 CT でより強い脳萎縮が認められた.

3) 初回 CT で正常所見を示す例にも遷延性意識障害に移行する例があり注目すべきであると思われた.

10. スポット溶接の溶接火花による外傷症例の検討

医療法人行堂会長野病院 今井 博之 西岡 利恭 小橋 吉博
荒川 雅久

最近5年間に経験した, 22例のスポット溶接の溶接火花による外傷症例を報告した. 傷害部位は両手指が主である. 本症は異物迷入と火傷という2面を持ち, 可及的に異物摘出を行なうが遺残する事が多い. 畑式電磁石を併用して摘

出しているが, 完全に摘出するのは難しく, 今後の改良が必要である. 受傷後早期の適切な処置により化膿する事も少なくなると考えられ, 正しい創傷処置, 管理方法の啓蒙が必要である.

11. 重症喘息重積発作にエーテル麻酔を行なった1例

岡山大学集中治療部 油 布 克 巳 難 波 健 利 小林 尚日出

β_2 アゴニスト, アミノフィリン, ステロイド等による一般療法の進歩により, 人工呼吸を必要とする重症喘息の頻度は減少しているが, 一方なお重篤な喘息発作によって死亡する例も見られている. われわれは一般療法に反応せず, 呼吸不全を呈した高齢の症例に対して, 呼吸・

循環管理に加えてエーテル麻酔を行ない, 重積発作を治癒せしめた.

エーテルは気管支拡張作用および気管分泌亢進作用を有し, これらの作用によって重症喘息重積状態を改善すると考えられる.

12. 糖尿病性難治性左足底部潰瘍に対する血管柄付き植皮術の1手術例

川崎医大胸部心臓血管外科 田 淵 篤 藤 原 巍 土 光 荘 六
稲 田 洋 正 木 久 男 森 田 一 郎
福 田 久 也 勝 村 達 喜
同 整 形 外 科 山 野 慶 樹

治療に難渋した左足底部の壊死に対して, 血管柄つき傍肩甲皮弁を使用し, 遊離組織移植を施行, 治癒せしめた1症例を報告する.

症例65歳男性, 左足底部壊死(5×6cm大)を主訴に入院となる. 4年前から糖尿病を指摘

されるも放置していた. 創の処置と共に糖尿病のコントロールを施行し, 1989年8月7日血管柄つき傍肩甲皮弁を使用した植皮を行った. 血管は肩甲回旋動脈と左後脛骨動脈を, 静脈を2本各々顕微鏡下に吻合した.

13. Subclavian Steal Syndrome の手術成績とその予後

岡山大学第二外科 松 前 大 杉 山 悟 内 田 發 三
妹 尾 嘉 昌 寺 本 滋

Subclavian Steal Syndrome は, 鎖骨下動脈ないしは腕頭動脈起始部より椎骨動脈までの間に生じた狭窄ないしは閉塞を本体とし, 脳および上肢の虚血症状を呈する症候群である. 著者

らは現在までに17例の本症候群を経験し, その11例に直達血行再建を, 6例に非解剖学的バイパス術を行った. 若干の文献の考察を加え, 本症候群の外科治療経験の概要を報告した.

14. 無輸血開心術に関する検討

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 杭ノ瀬 昌彦 畑 隆 登 難 波 宏 文
曾 根 良 幸 瀬 尾 和 宏 今 牧 瑞 浦
村 上 貴 志 谷 口 堯

未確定な無輸血開心術の規定因子の解明を目的とし, 昭和58年より本年8月までに無輸血開心術を試みた症例159例を対象とし, そのうち114例に無輸血開心術を成功し成功率は72%であった. 12の術前因子, 及び人工心肺関連因子として5因子, 計17因子を独立変数とし, 無輸血か否か, を目的変数とし解析し統計は変量選択性

多重回帰及び多重判別関数を用いた.

結果 無輸血開心術可能は, 人工心肺時間が短く, 術前 Ht 値が大及び体表面積が大, 若年者, 女性で $r = 0.54$, $P < 0.01$ で最適に重回帰され, これらの因子の偏相関は有意であった. これらの因子を用いての判別分析の結果, 無輸血開心術が可能か否かの有為な判別関数を得ら

れた。

し得る可能性が示唆された。

以上より、無輸血開心術が可能か否かを予想

15. 両側内胸動脈を用いた冠血行再建と僧帽弁置換の同時手術例

岡山大学第二外科 大谷 順 新井 禎彦 今井 茂郎
青景 和 英 村上 泰治 妹尾 嘉昌
寺本 滋

冠動脈バイパス術のグラフトとして、その長期開存性の点から内胸動脈（IMA）の使用頻度が急速に増加しており、我々の施設でも従来より前下行枝は IMA グラフトによる再建を first choice としているが、最近は左右両側の IMA

を用いた冠血行再建を積極的に行っている。今回、冠動脈狭窄を伴った僧帽弁閉鎖不全症例に対し、両側 IMA を用いた 2 枝冠動脈バイパスと僧帽弁置換術を同時に施行し良好な結果を得たので、その症例を報告する。

16. 股関節部 Enthesopathy の 1 例

岡山赤十字病院整形外科 生田 陽彦 三宅 完二 小野 勝之
那須 正義 井上 修一 板寺 英一
名越 充

Enthesopathy とは enthesis、すなわち腱や靭帯が骨に付着する部での障害を表わす。今回、我々は、股関節部に発生した疾患単位としての Enthesopathy を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。症例は 29 歳男性で大殿筋

付着部に激しい痛みがあり、組織検査によりこの部に cholesterolin 結晶を貪食した異物巨細胞の集族や石灰化、肉芽組織がみられた。cholesterin 結晶誘発性の付着部炎症障害と考えられた。

17. 陳旧性脊椎脱臼骨折に対する pedicular screw

岡山大学整形外科 寺井 祐司 中原 進之助 小西 均
石川 聡 宮本 宣義

陳旧性脊椎脱臼骨折をきたした 2 例について検討した。症例はいずれも不安定型損傷であり初期治療の時点で観血的に固定をする必要があ

ったと思われる。pedicular screw は必要最小限の範囲での強固な固定が可能であり特に若年者には有用と考える。

18. 両側外傷性股関節脱臼の 1 例

岡山済生会病院整形外科 永沢 大 定金 卓爾 和気 博文
川 澗 靖 人 人 見 康 満

今回極めて稀な外傷性両側股関節前方脱臼を経験したので報告した。症例は 66 歳男性で、農作業中、トラクターの後輪に右足を下肢外旋位でひかれ、右股関節に伸展、外旋、末梢からのつき上げ、左股関節はハンドルにより開排位で

外旋への力が加わり、前者は上方へ、後者は下方へ脱臼した。これまでの両側前方脱臼の受傷機転の報告は同じレベルの脱臼のみのものであり、本症のような報告はみられなかったのでその受傷機転を中心に報告した。

19. 巨大な肝海綿状血管腫の3切除例

倉敷中央病院外科 川口 義 弥 高三 秀 成

我々は最近巨大な肝海綿状血管腫に対して、肝切除術を施行した症例を3例経験した。うち2例では辺縁部より造影剤の流入を示す low density の CT 像, high echo と low echo の混在するエコー像, cotton wool-like pooling 像

を示す血管造影所見等, 典型的な画像を示したが, 1例では腫瘍の辺縁部及び中心部に石灰化が進んでいた為に, 上述の典型的画像は示さなかった。圧迫症状を呈する巨大血管腫は肝切除が第一選択であると考えている。

20. 術前胆管との交通を確認し得た感染性巨大肝嚢胞の1例

国立岡山病院外科 平井 隆 二 大西 敏 行 岸 淳 彦
松原 淳 宇野 浩 司 白井 由 行
田中 信一郎 野村 修 一 東 良 平
佐々木 澄治

症例：64歳, 女性。パーキンソン病にて治療中, 腹痛, 発熱をおこし入院。超音波, CT にて肝左葉外側区域を占める感染性の肝嚢胞と診断し, 肝内胆道との交通を疑ったので嚢胞カテーテルドレナージを施行した。嚢胞造影をした

ところ, 肝内胆管との交通枝を確認した。微熱が続くために, 開腹すると嚢胞は門脈臍部と炎症により強固に癒着し左葉切除の適応であったが全身状態不良のため, 嚢胞全摘除を施行した。術中, 交通する肝内胆管を縫合閉鎖した。

21. FNH と肝細胞癌との鑑別が困難であった肝腫瘍の1例

岡山大学第一外科 山元 勇 浜崎 啓 介 津下 宏
柏野 博 正 三村 久 折田 薫 三

52歳の男性で, 肝 S2 に超音波検査で中心癥痕様所見を呈し, Halo, モザイク様所見も認められず, 血管造影でも肝細胞癌特有の所見を認めず, CT では著変はなかったが, MRI で放射状の所見を呈する SOL を認め, 強く FNH

を疑わせた症例の肝切除を行った。組織学的には, むしろ分化型の肝細胞癌の要素が多かった。FNH の悪性化の報告もあり, 典型的な所見を示さない症例は肝切除が良策と考えられた。

22. 後腹膜原発神経鞘腫の1手術例

岡山済生会病院外科 村岡 篤 戸田 耕太郎 広瀬 周 平
筒井 信正 三村 哲重 川畑 正 充
木村 臣 一 佐々木 潔 片岡 和 男

神経鞘腫は, 一般に頭頸部に発生することが多く後腹膜に発生するものはまれで我々が検索しえた本邦報告例は95例であった。今回, 我々は術前に腓尾部腫瘍と診断された1手術例を供覧し, 若干の文献的考察を行った。男女比は54:41とやや男に多く, 悪性度は諸外国の報告と比

して, 本邦例では23%と比較的低く, 症状の大部分が腫瘤触知であった。後腹膜神経鞘腫は術前検査により診断することは極めて困難であり, 摘出後の病理組織診断に委ねられているのが現状である。

23. 腹膜中皮腫の1例

水島中央病院外科 江田 泉 為季 清和 竹内 龍三
森本 接夫

腹膜中皮腫は、比較的稀な腫瘍であるが、早期発見、術前診断の困難な予後不良な疾患とされている。

今回我々は、60歳男性、腹部膨満感を主訴と

して近医を受診し、肝癌の疑いで紹介され腹部悪性腫瘍との臨床診断にて手術施行し、病理診断にて初めて腹膜中皮腫と確認し得た症例を経験したので報告する。

24. 下咽頭頸部食道癌に対する遊離空腸移植の経験

岡山大学第一外科 森木 康之 上川 康明 阪上 賢一
折田 薫三

当科における遊離空腸移植術による頸部食道再建は、下咽頭頸部食道癌症例6例、胸部食道癌再建後の胃管壊死例1例の計7例である。移植術後の合併症として、術後出血2例、創部感染1例、上室性頻拍1例をみたが、遊離移植に

直接関係ある縫合不全、移植腸管壊死などは発生しなかった。本術式は、手術侵襲、合併症、術後機能の点から、頸部食道の再建法として優れていると考えられる。

25. 9歳女兒にみられた希有な食道狭窄

川崎医科大学消化器外科 小牧 隆夫 清水 裕英 牟礼 勉
吉田 和弘 藤森 恭孝 山本 康久
佐野 開三

症例は9歳女兒。6歳頃から嚥下困難と疼痛があり、上部消化管造影にて下部食道の全周性狭窄が見られた。画像診断上、平滑筋腫が疑われ、食道下部胃噴門側部分切除を行った。組織学的には、高分化の平滑筋腫に類似していたが、

被膜形成はなく内輪筋の肥厚が著明で、胃筋層の肥厚も見られた為、食道平滑筋のびまん性肥厚と診断した。小児における食道平滑筋のびまん性肥厚は稀な疾患であり、若干の文献的考察を加え報告した。

26. 小児外傷性十二指腸穿孔の1例

岡山赤十字病院外科 宇高 徹 総 大守 規敬 青木 淳
辻 尚志 古谷 四郎 川上 俊爾
小野 監作 大塚 康吉 佐藤 泰雄

小児の外傷性十二指腸穿孔の診断は必ずしも容易でなく、術式も症例によっては注意が必要と思われる。

症例：患者は9歳男児、屋根より転落し、腹部を打撲、近医に搬入され腹部CTにて後腹膜

気腫を認めドレナージ術のみを施行。当科に紹介され、開腹にて、十二指腸水平脚に約1cmの穿孔を認めた。穿孔部を含め楔状切除し、十二指腸空腸側々吻合しBraun吻合を追加、ドレーンを留置閉腹してよい結果を得たので報告する。

27. 胃悪性リンパ腫の手術経験

川崎医科大学消化器外科 柏田 順一郎

当科で経験した非上皮性悪性腫瘍は22例でそのうち胃悪性リンパ腫10例，胃平滑筋肉腫12例であった。胃悪性リンパ腫の平均年齢は56.8歳，性別では女性が多い傾向にあった。限局しているもの4例，CMA と広範囲であったもの6例

であった。術式は胃全摘6例と3/5を占めた。リンパ節郭清は1例を除き胃癌に準じてR3まで行っている。以上の結果をもとに病理学的検討も含め報告する。